慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	勲功華族の農場経営とその継承 : 海軍中将・ 仁禮景範の家族史
Sub Title	
Author	浜野, 潔(Hamano, Kiyoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2012
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.1/2 (2012. 3) ,p.315- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120300-0315

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

勲功華族の農場経営とその継承

――海軍中将・仁禮景範の家族史――

浜野　潔

一　はじめに

仁禮景範（にれかげのり）という名前を聞いて、ただちにその人物像を答えられる人は、今日それほど多くはないだろう。しかし、薩摩藩米国留学生の一人であり[1]、のち、海軍兵学校校長、海軍大臣などを歴任した元勲の一人として、かつては多くの人にその名を知られた存在だった。

戦前、霞が関にあった海軍省の建物の前には三つの銅像が立っていたが、その三人とは西郷従道、川村純義、そして本稿で取り上げる仁禮景範である[2]。西郷はいうまでもなく、大西郷の弟で陸軍から海軍に移り、海軍軍人として初めて大将・元帥に上りつめた人物。川村は長崎海軍伝習所以来、一貫して海軍畑を歩いたあと昭和天皇の養育係を務め、死後に大将へ昇進した唯一の人。これに仁禮景範を加えた三人に共通するのは、海軍卿・海軍大臣を務め黎明期の海軍建設に大きな功績を残したことであり、「海軍三元勲」として銅像が立つにふさわしい人びとであった。

公侯伯子男の五つからなる爵位は、明治一七年（一八八四）の「華族令」によって作られたが、この三人はすべて旧藩士の身分から勲功によって爵位を受けた最初の三二人の中に含まれている[3]。襲爵時の地位は、西郷従道（伯爵）が陸軍卿を務めたあと陸軍卿代理、川村純義（伯爵）が海軍卿、そして仁禮景範（子爵）が海軍軍事部長と、まさに陸海軍の中枢を占める存在だった。

華族令の公布により、政府の中枢を占める維新の元勲たちは、徳川時代の支配者である公卿、旧藩主と公的に対等の身分を得ることになる。社会的に身分を示すため

には、生活面においても、それなりの威信を外部に示すことが必要だろう。そこで、世襲の財産をあまり持っていなかった伯爵以下の新華族には「家門永続資金」として伯爵三万円、子爵二万円、男爵一万円といわれる資金が与えられ、さらに明治一九年（一八八六）には華族世襲財産法が作られて、華族の資産管理がはかられたのである。華族世襲財産法とは、華族が宮内大臣管理のもと土地に関し自由に世襲財産として設定できるものであり、売却したり抵当に入れたりすることはできなくなるが、一方、差し押さえられることもなくなり、特別な保護を受けられるというものであった。(4)

この法律を別の面から見れば、華族はその体面を維持するために、一定の財産を持ち、かつそれを管理してゆくことが義務づけられたということになろう。華族の中でも、上級の者になると、家令、家扶などとよばれる家政相談人がその管理にあたり保護、維持に努めたが、下級のものの多くは、自らその管理をする必要に迫られていた。

本号掲載の井奥成彦論文は、慶應義塾大学古文書室蔵の「船橋三田浜塩田文書」を用いて、仁禮景範の経済活動の一端に迫ったものであるが、海軍中将と塩田経営というのは、かなり異質な組み合わせに思えるかも知れない。しかし、家門永続資金として与えられた資金は当時としてはかなりの大金であり、インフレのリスクを考えれば何らかの資産運用に迫られたことは容易に想像される。

仁禮家が塩田経営を行っていたのは明治三八年までであるが、並行して明治三〇年（一八九七）からは北海道十勝平野で農場経営にも乗り出し、資産運用の多角化に努めている。さらに、この農場は専門の農業教育を受けた次男・景助（けいすけ）、そしていったんは仁禮家の手を離れるものの、娘婿の斎藤實（首相・朝鮮総督など歴任）によって買い戻され、昭和初年まで引き継がれた。

近年、華族については研究が蓄積されつつあるが、(5)個別の資産運用について掘り下げた事例はあまり多いとはいえない。(6)莫大な資産を運用した大名華族についてはともかく、仁禮景範家のような勲功華族の事例はほとんど明らかにされてこなかった。その意味で、「船橋三田浜塩田文書」を利用した井奥論文はきわめて貴重な事例を提供したといえるが、仁禮家の資産運用は、それに続く北海道の農場経営にまで視野を広げることによって初めてその全貌が見えてくると思われる。

そこで、本稿は対象となる時期を拡大し、仁禮景範家および娘婿の斎藤實家へと受け継がれた財産とそれをとりまく人物に焦点を当てる。とりわけ、三代目子爵の仁禮景助という無名の人物を中心に、勲功華族の「家族史」についても描写してみたいと思う。

二　初期勲功華族の資産運用

すでに述べたように仁禮景範は明治一七年（一八八四）、華族令公布とともに勲功によって爵位を授けられた三二人のうちの一人である。その後、明治二〇年には新たに二回に分けて五一人に叙爵が行われ、明治維新期の勲功華族（軍人・文官）が出そろった。この八三人を仮に「初期勲功華族」とここでよぶことにするが、この中で大規模な土地を取得し、資産運用をはかった者はどれくらいいたのだろうか。

旗手勲が作成した華族の土地取得に関する一覧表から、初期勲功華族の事例を取り出すと、年代順に大隈重信から仁禮景範にいたる一二名の者が、土地の貸し下げ・払い下げを受け農業、牧畜業などを営んでいたことがわかる[7]（表一）。この表が必ずしもすべての事例を網羅しているとはいえないが、一定の傾向を探るには有用だろう。

まずなんといっても印象的なことは、土地を取得した勲功華族の出身地が曽我佑準を除き、すべて薩摩・長州・佐賀の雄藩に限られていることである。もちろん、初期勲功華族の出身地そのものが薩長土肥に偏っているとはいえ、大規模な土地取得の場合、さらにその独占度が増していることが明らかである。

次に、明治一〇年代の土地取得はほとんど関東地方に集中しており、なかでも政府主導で開拓事業を行った栃木県の農場が大半をしめていた[8]。これに対して、明治二〇年代になると北海道の数が増え、栃木県と相半ばするようになる。

さらに規模について見てみると、百町程度の小規模なものから、千六百町を超えるものまで様々であることがわかる。ここには示されていないが、公卿華族および大名華族など、いわゆる旧華族とよばれる人びとによる土地取得の規模もほぼ同じ範囲に収まっており、それほど大きな差は見られない[9]。

仁禮景範が、まずは東京近辺の塩田経営からスタートし、さらに北海道開拓へと事業を拡大したという点は、関東から始まり、北海道へと拡大した初期勲功華族の資

表１　初期勲功華族の主要な土地取得事例（明治前期）

西暦	年	華族名	出身	爵位	場所	面積（町）
1878	明治11年	大隈重信	佐賀	伯爵	千葉	132
		青木周蔵	長州	子爵	千葉	314
1879	明治12年	三島通庸（肇耕社）	薩摩	子爵	栃木	1036
1880	明治13年					
1881	明治14年	松方正義ほか	薩摩	伯爵	宮城	815
		西郷従道	薩摩	伯爵	栃木	263
		大山巌	薩摩	伯爵	栃木	226
		青木周蔵	長州	子爵	栃木	1561
1882	明治15年					
1883	明治16年	品川弥二郎	長州	子爵	北海道	764
		品川弥二郎	長州	子爵	栃木	249
1884	明治17年	山県有朋	長州	伯爵	栃木	728
1885	明治18年					
1886	明治19年	三島通庸	薩摩	子爵	栃木	991
1887	明治20年	山田顕義	長州	伯爵	北海道	133
1888	明治21年					
1889	明治22年					
1890	明治23年					
1891	明治24年	山田顕義	長州	伯爵	栃木	110
1892	明治25年	佐野常民	佐賀	子爵	栃木	258
1893	明治26年	松方正義	薩摩	伯爵	栃木	1654
1894	明治27年					
1895	明治28年					
1896	明治29年	曽我佑準	柳河	子爵	北海道	1617
1897	明治30年					
1898	明治31年	仁禮景範	薩摩	子爵	北海道	700

出典）　旗手勲『日本における大農場の生成と展開』第 14 表（pp. 48-49）より抜粋。

産運用行動に沿ったものと評価できる。

次節では、このような土地取得が明治三〇年（一八九七）という時期に行われた理由について、仁禮の履歴と家族構成、さらに「北海道国有未開地処分法」の制定という法改正に注目することによって、さらに考察を進めたい。

三　塩田経営から北海道開拓へ

仁禮景範が塩田経営に加え、明治三〇年になって北海道の農場経営へ進出したのはどのようなきっかけによるのだろうか。叙爵時に海軍軍事部長だった景範のその後の履歴を見てみると、明治一九年（一八八六）には参謀本部海軍部長、二二年には横須賀鎮守府長官、二四年に海軍大学校校長、二五年に海軍大臣と順調な出世を見せている。

海軍大臣となった仁禮が力を注いだのは、海軍の軍令権を陸軍の参謀本部から独立し、陸海軍対等を実現することだった。海軍はすでに明治一七年（一八八四）、軍事部を設けていたが、その後も軍令は一貫して参謀本部が統括することになっており、海軍は陸軍の下という位置づけを脱していなかった。続けて、二六年（一八九三）には海軍軍令部が設置されるが、参謀本部と対等なのは、あくまで平時に限られており、戦時においては参謀本部が統括することに変わりなかった。海軍の悲願は、陸軍の抵抗により実現を阻まれたのである。[10]

その後、国会や政府内部から海軍行革に不熱心との批判を浴びると、二六年三月、仁禮は海軍大臣を辞任し、予備役に編入された。なお仁禮の最終階級は海軍中将であるが、このときまだ海軍には大将は一人も存在していない。最初に大将になったのは、仁禮の後を受けて、海軍大臣に就任した西郷従道であり、翌、明治二七年のことだった。そういう意味で、海軍中将・海軍大臣の地位に上った仁禮は、当時としては階級上、最高位にまで到達したのである。

予備役に編入された仁禮は、この時、六二歳。枢密顧問官に任命され、第一線からは退いた形となった。その後、山本権兵衛官房主事（のち軍務局長）が西郷海相の下で海軍の大行革を進めたため、将官以下の構成は一挙に若返える。仁禮自身、もう引退という気持ちになっても無理のない状況にあったことは間違いない。しかし、他方で仁禮の家族構成に着目して見てみると、まだ幼い子供もおり、少なくとも経済的には完全な引退というわ

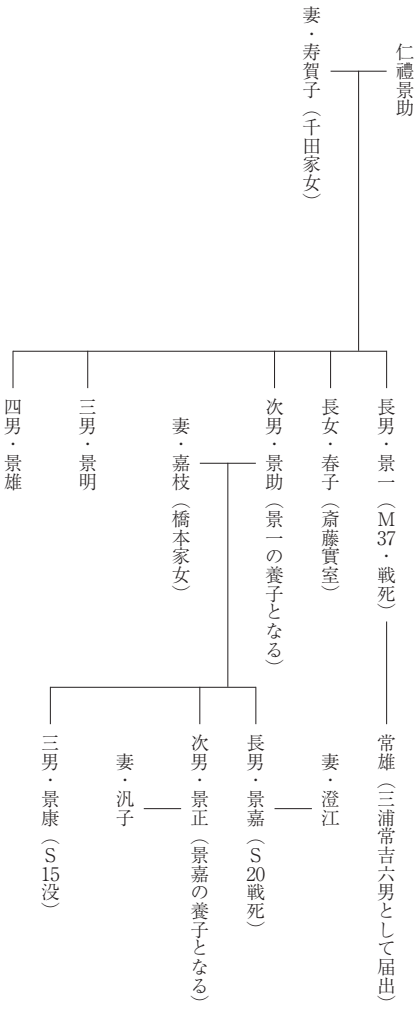

図１　仁禮家家系図
出典：「斎藤實記念館」資料より抜粋

けにいかなかった様子が見えてくる。記録によると仁禮には五人の子供がいた（図一・仁禮家家系図も参照）。その履歴と、景範の海軍大臣辞職時（明治二六年）の動静は、以下の通りである。

長男の景一（かげかず）は明治二年生まれで、明治二四年、米国アナポリス海軍兵学校を卒業し任官。当時、海軍任官後三年目の青年将校であった。

長女の春子は明治六年生まれ。東洋英和女学校を卒業し、景範の海軍兵学校校長時代の教え子で、海軍大尉の斎藤實と前年に結婚したばかりだった。

次男の景助（けいすけ）は明治八年生まれ。学習院を経て、東京府立第四中学校（現、東京都立戸山高等学校）をこの年、卒業した。なお、仁禮家の系図資料によると、この下に三男の景明の名前が記載されているが、その他の資料にはいっさい登場しないので、早逝したと考えられる。(11)

四男の景雄（かげお）は明治一八年生まれ。当時まだ満七歳であった。

長男、長女はすでに成人し、一人前の存在であったが、次男景助と四男景雄は未成年であり、景範の扶養家族であった。ここで、注目すべき点は、次男の景助がのちに、

宮城農学校（現、宮城県農業高等学校）を経て、埼玉県秩父郡立農学校（現、埼玉県立秩父農工科学高等学校）の教員になったという経歴である。[12]

宮城農学校は明治一八年（一八八三）、中等レベルの農学校として設立された学校であり、現在も県下の農業教育の中心を担っている。しかし、景助のようにすでに旧制中学校を終えた者からすれば、通常のコースからはずれた学校であった。農学校には第一種と、第二種の二つの種類があり、前者は一五歳以上で小学校中等科卒業、後者は一六歳以上で中学校初等科以上が入学資格となっていた。ちなみに、宮城農学校は第一種農学校であったので、高等小学校卒で入学可能な学校だったのである。

このように、学校としては旧制中学より、むしろ格下の宮城農学校であったが、景助の意図は当然のことながら学歴にあったのではなく、むしろ農業に関する技術や、経営能力を身に着けることだったと思われる。たとえば、今日でも大学を卒業して、専門学校へ進学する者は珍しくないが、景助も同じような目的だったと考えれば理解しやすい。

景助の宮城農学校進学には、景範の意図が大きく関わった可能性が高い。景範は、早逝と思われる三男を除く、四人の子供にかなり熱心に教育を施しているからである。長男は攻玉社から米国アナポリス海軍兵学校へ進学させたが、この留学は当初は私費留学であり、相当の費用を個人負担した可能性が高い。[13] 長女の春子は東洋英和女学校を卒業したが、この学校は明治一七年、カナダ人宣教師によって設立され、社会性と国際性を重視する女子教育としてはかなり先進性を備えた学校だった。次男の景助については、すでに述べたが、四男の景雄も海軍兵学校へ入学している。景雄は結局、中退し、その後、在野の昆虫学者という道を歩むが、[14] いずれにしても高いレベルの学問を授けるという点は、すべての子供に共通していた。

景範自身、幕末の薩摩藩米国留学生の一人であり、教育の持つ重要性を当時としては強く意識する立場にあった。さらに、景範が米国留学中、宗教家トマス・レイク・ハリスが設立した「新生社」（The Brotherhood of the New Life）のコロニーに滞在し、半年間、農耕や牧畜に従事した経験があったことも見逃せない。犬塚孝明は「後年の仁礼の温厚篤実で軍人らしからぬ性格も、あるいはこうした留学時の宗教体験に根ざしているのかも

しれない」と述べているが、この経験もまた、景助に農業を学ばせる動機の一つだったのではなかろうか。[15]

このように考えると、北海道における農場経営と景助の農学校進学とは、明らかなつながりがあると思われる。当時、北海道にあった農学校は、高等レベルの教育にあたる札幌農学校が唯一であることを考えると、宮城農学校は中等レベルの農業教育機関の北限にあたる学校であり、北海道で実地に役立つ農業技術を学ぶためには最適の学校だったと考えられるからである。

そこで問題となるのは、農場の貸し付けと景助の農学校進学の前後関係がどうなっていたのかということである。この貸し付けに関しては、明治三〇年、すなわち、まさに仁禮が貸し付けを受けた年に成立した「北海道国有未開地処分法」という法律が重要だろう。

北海道の開拓は、士族移民や屯田兵を中心に政府の直接保護の下に進められてきたが、明治一九年、北海道庁が設置されると「北海道土地払下規則」が制定され、「無償貸し付け・一定期間後有償払下げ」の形で入植を奨励する間接保護の方針へと転換がはかられた。さらに、三〇年には「北海道国有未開地処分法」が公布され「無償貸し付け・成功後無償付与」というきわめて有利な条件となり、一人当たりの貸し付け面積の上限も大幅に引き上げられた。[16] 仁禮は第一線を退いたとはいえ、こうした改正の動きを事前に知る立場にあったことは、当然考えられる。法改正と同じ年に貸し付けを受けることができたのは、改正をにらんで以前から準備を進めていたことを示唆しており、さらに、薩摩藩出身という点も有利に働いた可能性が十分にある。

一方、景助が宮城農学校に入学したのはいつだろうか。景助に関しては、府立四中卒業後の経歴を明らかにする資料が見つかっておらず、不明の点が多い。そこで、宮城農学校の卒業年から逆算して入学年を推定してみよう。第一種農学校の修業年限は二年が基本であったが、同時に「但此年限ヲ一年以内増加スルコトヲ得」という但し書きがあった。明治一八年（一八八五）の「府県学事年報要略」という資料によると、宮城農学校については「其学期ヲ三年トス」という文言があり、但し書きを利用して三年制のカリキュラムをとっていたことが判明する。[17] したがって、景助の入学年は明治三〇年であると推定できる。

この結果、北海道の土地払い下げと次男景助の農学校進学は同じ年であったことが判明した。ここからは、あ

くまで推測の域を出ないが、「北海道国有未開地処分法」の制定により将来の無償払い下げを察知した景範が農場経営を思いついたこと、さらに次男景助に農業を学ばせることで、やがては農場主としての道を歩ませたいという希望が生まれたのではないだろうか。その時期は、明治二〇年代末のことであり、景範と景助の話し合いの中で出てきたものと考えられる。

景範の子女を改めて見てみると、長男景一は海軍士官、長女春子は海軍士官の妻、そして四男の景雄は海軍兵学校の生徒（のち中退）という、まさしく海軍一家を構成していた。この三人については、とりあえずその後のコースを思い描くことができたのに対し、旧制中学に進学した次男景助は、海軍一家仁禮家の中ではひとり異質の存在であった。景範としては、何かここで景助の歩む道を作りたいと思ったのではなかろうか。景範には、すでに塩田経営という「副業」の経験があった。いわば、この副業をさらに発展させ次男に継がせることが、北海道開拓の目的だったと考えられるのである。

四　農場経営とその挫折

仁禮景範が「北海道国有未開地処分法」の公布によって明治三〇年（一八九七）、総面積約七〇〇町の土地の無償貸し付けを受けた場所は、北海道河東郡音更村（現・音更町）という場所だった。翌、三一年から入植が始まったが、次男景助は宮城農学校で勉学中の身であり、経営を任せることは、まだできなかった。そこで、薩摩出身の北海道庁役人からの推薦で、西洋農業に詳しい金子安蔵という人物を管理人として雇い、宮城県や富山県などから七〇戸の入植者が入って開拓がスタートする。[18]

金子は当時、四八歳。旧会津藩士であり、明治七年、開拓使でお雇い外国人エドウィン・ダン、ルイス・ベーマーなどから西洋農業を学ぶ現術生徒となった経験を持っていた。彼は、明治一二年、後志郡山田村（現、余市郡余市町）で、後に「国光」と命名されるリンゴの新種を作り出したことで歴史に名前を残している。[19]

明治三三年（一九〇〇）、農場開設から三年目の一一月二二日、景範は七〇歳で、その生涯を終えた。景助はこの年、宮城農学校を卒業していたが、ただちに、開校したばかりの埼玉県秩父郡立農学校に実習を兼ねて赴任しており、北海道には行っていない。

農場は名義上、長男の景一のものとなったが、海軍将

校である景一が実際に経営に携わることはなかったと考えられる。景助が秩父郡立農学校を辞めた時期は不明であるが、大正元年発行の『現代人名辞典』の記事に「幾何もなく「農学校を」辞して北海道十勝国に於ける所有地開拓に力め[20]」とあることから、明治三三年（一九〇〇）の秩父郡立農学校赴任から間もない時期と思われる。

景助がはっきりと農場経営に関わったことが確認されるのは、明治三六年（一九〇三）、「仁礼景助氏が校舎・校具その他設備を施し、上組簡易教育所と名づけて開校。児童数約三〇名」という『音更小学校沿革』の中の記述である[21]。このころには、名義上の農場主は景一であっても、実務上は景助が経営にあたっていたことをうかがわせる。

翌、三七年、仁禮家に悲報が届いた。爵位を継いでいた景一が日露戦争の旅順港閉塞作戦に出兵。五月一五日、乗艦の初瀬が機雷に接触して沈没し、享年三六歳で戦死を遂げたのである。景一には男子がいたという記録があるが[22]、他家の戸籍に入ったので、家督を相続することはできなかった。そのため、次弟の景助が景一の養子となり、五月二六日、子爵を襲爵した。

景助の農場経営の実態を示す一次資料は残されていないので、不明な点が多い。唯一の記述は、すでに紹介した『現代人名辞典』に「大規模の農業経営に従事し、巨額の大豆を産出しつつあり」という記事である[23]。

十勝平野は火山灰地であり、水もちが悪いので水田の維持は難しい。さらに、気温差がきわめて大きいという自然条件を考慮すると、もっとも適した作物は豆類であった。なかでも大豆は労働力が乏しい中、粗放農業でも生産が可能なので、「十勝大豆」と呼ばれるほど盛んに作られた。大豆は、みそ・しょうゆの原料として需要が高く、明治期の十勝では作付面積のほとんどを占めていたのである[24]。

こうして十勝音更の農場経営が軌道に乗る一方で、船橋の塩田経営は大きな困難に直面していた。その理由は、本号掲載の井奥論文でも述べられているように、明治三〇年代半ばから台湾産の塩を用いた再製塩の生産が増えたこと、さらに明治三八年（一九〇五）には塩専売制が施行され、価格の上昇によって需要が低迷したためであった。こうした状況を受けて、景助は同年、船橋三田浜塩田を売却している。

北海道の農場経営に専念することになった景助であるが、このころの生活は公私ともに充実していた様子がう

かがえる。景助は海軍中将・相浦紀道男爵の姪ツヤと最初、結婚したが、明治四一年（一九〇八）には離婚。ほどなくして大阪在住の橋本与兵衛の長女嘉枝子と結婚し、四四年には長男が誕生。二人の名前からそれぞれ一字をとって景嘉（かげよし）と名付けた。

また、同じ年に出版された『現代娯楽全集』という本には序文を寄せており、文化人としての姿も垣間見せている。景助が序文を寄せた理由はわからないが、この本は七五〇種以上の娯楽を集めた大部な本であり[25]、明治期の生活史に迫る貴重な資料として、近年、半澤敏郎氏や黒岩比佐子氏によって紹介されている[26]。

さらに、肥前藩最後の藩主松浦詮の長男、松浦厚伯爵との交流も興味深い。茶人としても有名な松浦は大正二年（一九一三）、音更に景助をわざわざ訪ね、酒を酌み交わした。このとき松浦が詠んだ漢詩が現在も残っているが、「雄大な自然を背景に豊かな畑が開ける当時の農場を悠久と伝え[27]」る詩であった。

しかし、こうした順調な日々も長くは続かなかった。景助は必要な資金を広部銀行という金融機関から借り入れていたが、天候に出来ばえが左右される大豆は収穫量の変動が激しく、借金の返済に失敗。農場は銀行の管理下に置かれることになった[28]。景助が農場を手放した時期ははっきりしないが、大正六年（一九一七）には四二歳の若さで隠居の手続きを取っており、その少し前のことであったと推定される[29]。

仁禮景範が夢見た農場経営は、こうしてわずか二〇年で幕を閉じたかに見えた。しかし、地元で「仁禮農場」とよばれていたこの土地は娘婿の斎藤實が大正七年に購入し、一族の手に残ることになる。斎藤は、大正三年にシーメンス事件の責任をとって海軍大臣を辞任し、予備役に編入されたが、当時、まだ五〇代半ばであり、引退には早い年齢であった。

斎藤は仙台藩の分家、水沢伊達領の出身であり、旧藩主の留守家の後継ぎ、邦太郎を自宅に預かっていた。この邦太郎の将来の仕事として考えたのが、「仁禮農場」を受け継いで開拓をさらに進めるというプランだったのである。

購入にあたって形式的には「東北拓殖合資会社」という会社が設立され、代表には朝鮮郵船の千葉隆氏が就任した。また、出資者として留守邦太郎、武田秀雄海軍中将らが名を連ねたが、実質的な土地所有者は斎藤實であった[30]。農場を手に入れた斎藤の談話が残っている。

私は旧留守家の息子（邦太郎氏）を預かって居って、小学校からずっと私の子供と一緒に勉強させていた。それが漸く中学校を卒業したが、どうしても上級の学校へ行く気分にはならないらしいので、これは農業でもやらせた方がいいだろうというので、丁度私も暇な体ではあるし、北海道にでも行って一緒に畑づくりでもしようと思い立った。それで北海道の十勝に開墾地の払下げを願って色々準備も整え、その子供が一年志願の兵役を済して帰ったのを待ち、いよいよ出発と言うことになった。[31]

ところが、この北海道移住計画は直前で中止となった。郷土岩手出身の原敬首相から直接に、朝鮮総督への就任を依頼されたのである。こうして、大正八年（一九一九）八月、斎藤は妻春子と邦太郎を伴って、朝鮮へと出発した。

斎藤は元海軍将校で退役軍人の茂原鋭一という人物を管理人に雇い、「音幌農場」と改名した農場の経営をすべて任せている。[32]このころは、第一次大戦末期であり、ヨーロッパの食糧不足を背景に豆の輸出ブームがおこっていた。とくに菜豆（インゲンマメ）の需要が高まり、

十勝地方では大豆からの転換が急速に進む。このブームは大戦後もしばらく続いたようであり、帯広には豆問屋が立ち並び、「豆成金」という言葉まで生まれた。[33]斎藤の農場もこのブームに乗って、しばらくの間は順調な経営を続けたと想像される。

しかし、大戦ブームが終わり農産物価格が下がると、一転して農場経営は苦しくなった。昭和四年（一九二九）、管理人の茂原は銀行から借りた負債の返済期限が迫り、小作地四七〇町歩を一六万円で土地ブローカーに売却したので、小作人たちは、耕作権の維持を主張して反発。同年九月、「音幌農場小作争議」とよばれる事件に発展した。[34]

小作人側は農民大会、演説会を開くとともに東京と朝鮮に代表団を派遣し、世論に窮状を訴える行動に出る。さらに先鋭化した争議団の一部は「全国農民組合北海道連合会」に応援を要請するにいたって、事態は急速に進展した。すなわち昭和五年（一九三〇）二月、新旧地主がそれぞれ一万五千円ずつ、合計三万円を争議団へ補償金として支払うことによって妥結にいたったのである。

小作人を巻き込んだこうした騒動は斎藤にとって決して本意のものではなかっただろう。同じ年、彼は農場の

一部、二町七反歩と二千円を寄付し、観音寺という寺の建立を援助した。小作争議によって混乱させた地元農民との融和に努めたのである。

斎藤は昭和七年（一九三二）、総理大臣兼外務大臣に就任。その後も内大臣という重職を歴任するが、昭和一一年、二・二六事件で凶弾に倒れ、悲劇の最後を迎えた。一方、音幌農場は新たな地主の元で戦後の農地改革まで存続したのである。

五　まとめ

現役の海軍中将が塩田を経営したり、退役後、北海道で農場を経営したりするのは、戦前の軍人に対する一般的なイメージからすると、多少、違和感を覚える話である。しかし、勲功によって華族に列せられた軍人たちは、莫大な資産を持つ大名華族と生活面でも対等にふるまうことが求められており、華族としての体面を保てない者は爵位を返上するべきというプレッシャーの下にあったことを考えれば、けっして不思議な話とはいえない。

仁禮景範には三人の男子と一人の女子が育ったが、うち、二人の男子には海軍将校への道を歩ませ、女子は海軍将校へと嫁いだ。浅見雅男は華族の名簿を丹念に分析し、軍功華族の場合、約一八〇人中、六八人の軍功華族の子供八四人が軍人になっていることを明らかにしている。最低限一人の子供が軍人になったケースは四割弱という計算だが、男子が生まれなかった者もいただろうし、また士官学校、兵学校の受験はかなり難関であったことを考慮すると、「軍功華族づくりのねらいが、それなりに当たったことの証といえるのではないか」と浅見は評価する。[35]

では、子供が軍人にならなかった、あるいはなれなかった場合はどのような道を選んだのだろうか。明治期に、関東や北海道の開拓地で農場経営を行った事例が多かったことはすでに見てきたが、実際には失敗例も多かった。

仁禮景範の場合は、軍人の道を歩まなかった次男景助の将来の生計確保という目的から、六〇代という年齢で北海道の開拓に乗り出したものと考えられる。彼の農場経営の事例が他の華族や財閥の場合と比べて特異なのは、景助を農学校に送り、農業技術を基礎から学ばせるという積極性だろう。この背景には、かつて景範が米国留学中、宗教家トマス・レイク・ハリスが設立した「新生社」のコロニーに滞在し、半年間、農耕や牧畜に従事した経験が影響した可能性を指摘した。長男景一を米国海

軍兵学校に留学させたのと同様の教育的情熱を次男に対しても注いでいたのである。

景助の農業経営は一時期、大豆の増産で大きな成功をおさめたが、単一作物に依存する農業経営は、どうしても不安定なものにならざるを得なかった。景範の描く目論見は、農場開始からわずか二〇年で失敗してしまう。

しかし、その意志は娘婿の斎藤實によって受け継がれた。斎藤もまた、息子同然に育てていた旧藩主の跡取り、留守邦太郎を農場主として育てたいという、景範と同様の目的を思い描いていたことは興味深い。「仁禮農場（音幌農場）」の開拓事業は、このように子弟への事業継承ということが強く意識された華族資産運用の事例として、評価できるのである。

註

（1）仁禮景範は、留学時代に克明な日記をつけており、幕末留学生に関する貴重な記録となっている。犬塚孝明「第二次薩摩藩米国留学生覚え書―日米文化交流史の一齣」『日本歴史』四五三号、一九八六年。なお、日記の翻刻および幕末維新期の景範の履歴に関する詳細は、犬塚孝明「仁礼景範航米日記」、「同（その二）」『研究年報』一三号～一四号、鹿児島県立短期大学、一九八五年～八六年を参照。

（2）明治三八年、東郷平八郎、井上良馨、山本権兵衛らによって三海将銅像建設が呼びかけられ、図案募集を経て、四〇年に完成した（国立国会図書館・斎藤実関係文書）。なお、これらの銅像は太平洋戦争中の昭和一九年、金属供出のため撤去され　現存しない。

（3）家柄以外の理由で華族になった者は、華族令公布以前には大久保利通、木戸孝允、広沢真臣のそれぞれ遺族の三家のみであったが、華族令公布後に一挙に二七名が爵位を受け、三二家になった。

（4）旗手勲『日本における大農場の生成と展開』一九六三年、御茶の水書房、三二～三四頁。

（5）華族については近年刊行された、浅見雅男『華族誕生―名誉と体面の明治』一九九九年、中公文庫、同『華族たちの近代』二〇〇七年、中公文庫、小田部雄次『華族―近代日本貴族の虚像と実像』二〇〇六年、中公新書、の三冊がきわめて有用であり、本稿も華族に関する基礎知識の多くをこれらの本に負っている。

（6）華族の資産および資産運用に関するすぐれた研究として、旧土浦藩主子爵土屋家の史料を分析した、千田稔「華族資本の成立・展開―一般的考察―」『社会経済史学』五二巻一号、一～三七頁、一九八六年、がある。

（7）これ以外に薩摩藩士が共同して明治一二年に開墾した肇耕社などの事例がある。『日本における大農場の生成と展開』一九頁。

(8) 栃木県那須地方の開拓については、『日本における大農場の生成と展開』一九～二〇頁。
(9) ただし例外は、明治二二年、三条実美、蜂須賀茂韶、菊亭修季らが北海道に作った華族組合農場（五万町）であり、旧華族を中心に出資者を募り、五万町にもおよぶ土地を開墾した。『日本における大農場の生成と展開』七五～一二七頁。
(10) 戦時においても参謀本部と海軍軍令部が対等となるのは、日露戦争直前の明治三六年、「戦時大本営条例」の改定後である。
(11) 「仁礼家家系図」（水沢市・斎藤實記念館）
(12) 古林亀治郎編『現代人名辞典』一九一二年、中央通信社（復刻版『明治人名辞典』一九八七年、日本図書センター）、一三三頁。
(13) 途中で、この留学は公費留学の扱いに変わった（手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧』第二巻、一九九二年、柏書房、一八一～一八二頁）。
(14) 仁禮景雄の昆虫研究については、猪又敏男「昆虫探検の歴史を探る（五）仁礼景雄と鹿野忠雄」『月刊むし』三四四号、二八～三一頁、一九九九年、を参照。
(15) 「第二次薩摩藩米国留学生覚え書―日米文化交流史の一齣」四七頁。
(16) 『日本における大農場の生成と展開』一六一～一六三頁。
(17) 伊藤稔明「農学校通則に基づく公立農学校の種別に関する一考察」『人間発達学研究』第一号、一～一二頁、二〇一〇年。
(18) 『音更百年史』四三頁、二〇〇二年。「音幌農場（音更町）上」『十勝毎日新聞』二〇一〇年九月二二日。
(19) 『余市農業発達史』一一四～一一五頁。
(20) 『現代人名辞典』二三頁。
(21) 音更小学校沿革 http://www.edu.town.otofuke.hokkaido.jp/otofuke/enkaku.html（二〇一一年九月一二日）。
(22) 「仁礼家家系図」（水沢市・斎藤實記念館）には、景一の子供として、「常雄（三浦常吉六男として届出）という記載がある。
(23) 『現代人名辞典』二三頁。
(24) 「もっと知りたい　十勝の農業」『十勝毎日新聞』二〇〇九年一〇月一七日。
(25) 国会図書館のデジタルアーカイブ（http://porta.ndl.go.jp/）で全文が公開されている。
(26) 半澤敏郎「伝承のなかの童遊び」『早稲田学報』一一八九号、一四頁、二〇一一年。黒岩比佐子氏のブログ「古書の森日記」。（http://blog.livedoor.jp/hisako9618/）二〇〇五年一二月一九日）。なお、序文を依頼したと考えられる出版元晴光館の館主は福田滋次郎という人物であり、わが国最初の類語辞典『日本類語大辞典』の出版等で知られるが、景助との関係は今のところ不明である。
(27) 「音幌農場（音更町）中」『十勝毎日新聞』二〇一〇年九月二三日。
(28) 『音更百年史』七七六頁。
(29) 大正五年一月一一日付『北海タイムズ』には、「大正

二年に於て十勝主要物産たる雑穀価格暴落せる為め其総額を減殺せる」という記事があり、あるいはこの暴落が経営悪化の引金になった可能性もある。

(30)『音更百年史』七七六頁。

(31)『斎藤實追想録』一六七～一六八頁。

(32)『音更百年史』七七六頁。

(33)「もっと知りたい　十勝の農業」

(34)　坂下明彦「北海道における自作農創設政策の展開と特質」『北海道大学農経論叢』四一号、二三～四九頁、一九八五年。「音幌農場（音更町）下」『十勝毎日新聞』二〇一〇年九月二四日。

(35)『華族たちの近代』一九二頁。

［付記］本研究の一部は、平成二三年度関西大学研修員研修費によって行った。また、資料収集にあたっては、斎藤實記念館、関西大学図書館、近畿大学図書館のご支援を得ることができた。ここに付記し、厚く御礼申し上げる次第である。